

元稹の「秋非我獨秋」の典拠と影響

黄 幼 欣

日本における「白氏文集」の流伝盛行の由来に言及した大江匡房の「江談抄」の記事に拠れば、嵯峨天皇が或る時河内館に幸して作らされた御製の一首の中に、

閑閑唯聞朝暮鼓 登樓遙望往來船

の二句があつた。帝は御心あつて、小野篁を召して、これをお示しになると、篁は拝吟して、やがて畏つて、「御製まことに結構で御座りまするが、恐れながら「遙」の一字を「空」と改めさせらるれば、更にもなく立派になるで御座りませう」と奏上げた。帝はびつくり遊ばされて、「偉いな。この句は実白氏の句で、それを以て、一つ其方を試してみたのだが、「遙」の字はもと「空」とあつたのだ。其方の詩情はまるで楽天そのままであるぞ」と仰せられた。

この逸話の次第は、当時渡來した「白氏文集」は、唯だ御所に秘蔵されている一部だけであつたが、帝はこれを観覧あつて後に行幸があり、この一聯を人知れず御製の中に入れて、篁の才を試みさせられたのであつた。

当時篁の才名は唐土まで聞えていた。そして楽天は篁が来唐の日を待ち焦がれて、翹望の詩までを作つた、といわれた。従つて、白楽天の詩集がその生前に既に日本に流伝したことは察せられるだろう。当時王朝詩壇は、白氏に対し、仰望の関心を持ち、或る者は白氏の句を取り入れたり、或る者は白氏の詩の調子を真似たり、或る者は白氏の句との暗合を喜んだりした。また、江家の人々が次々と天皇の侍読として「白氏文集」を進講したこと以外に数多くの逸話も伝えられている。江家が白氏を喜び、文集を研究した事は非常なものであつたことに気付くだろう。

「枕草子」に、「文は文集、文選、はかせの申文」とあつて、つまり詩文集の首位に「白氏文集」が置かれている。そして、「源氏物語」にも「白氏文集」からの多数の影響が窺える。更に「和漢朗詠集」の漢詩では、白楽天の作品が大體に収められた。「千載佳句」上下二巻にその詩句一千八十二首のうち、「白氏文集」より採録されたもの、大凡五百三十五首に及ぶと推測されている。楽天の詩文が日本の文壇に重んぜられ、盛んに愛誦せられた事は、以上の簡単な叙述によつても既に明かだろう。これより他に「平家物語」や「太平記」、「徒然草」や謡曲に出てくる事は、

大抵世間周知のところであり、ここには省略するでしょう。ただし、あまりにも白楽天の盛名が喧伝させられたせいか、恐るべきことは、「犬虚に吠えて萬犬吠を伝ふ、一人唱ふれば、衆口金をとくすに至ることである。例えば、白楽天の「燕子樓中霜月夜、秋來只爲一人長」からの翻案であろう、と世間に推測せられていた菅公の「此秋独作ニ我身秋一」や、大江千里の「我身ひとつの秋にはあらねど」という二句はその例である。

二

大江千里が詠じた歌「月見ればちゞに物をそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」は「古今集」の秋上一九三には、是貞親王家の歌合によんだ、という詞書がついている。恐らくは「白氏文集」巻十五「燕子樓三首并序」(元和十年)の「端々窓明月滿々簾霜、被冷燈殘私ニ臥床一、燕子樓中霜月夜、秋來只爲一人一長」(千里の「句題和歌」に所収)を翻案したものであろうとする「古今余材抄」(岩波書店「契沖全集」八)の説がある。他に、「古今宋雅抄」に、

月は陰気なれば。打ながむれば心すみ。あはれをすゝめてちゞにものがなしければ。わが身ひとつのやうに覚ゆるを、我身ひとつの秋にはあらねど、いふ。白居易 秋來只爲一人一

長

と明記している。だが、大江の「月みれば」の歌が前掲した楽天の

詩句「秋來只爲一人一長」に基づくものという説に対し、塚原鉄雄氏は疑問を出し、本当は元稹の詩句「秋非ニ我独秋一」(「解秋十首」より、元和六、九年作)と關係づけられるのではないかと竹岡正夫氏への私信に指摘した(「古今和歌集全評釈古注七種集成」上、五九〇頁、竹岡正夫著、右文書院、昭和五十一年)。

一方、楽天の詩句からの翻案という説と違つて、「延五記」には、「古文孝経」三才章注「日月不下爲一物一晦中其明上」に拠り、月は無心ながら、わが心により、月に愁いを見る、と解する説がある。

竹岡氏の「古今和歌集全評釈」に拠つて、千里の歌を訳してみれば、

月を見ると、千とばかりに物が悲しい。わが身ひとつの秋ではないのだけれど。

となる。竹岡氏は、千里の歌を一語一語が漢語の翻訳という感じで、曲折・陰影に富んだテニヨハの使用も少なく、和歌独自の細やかな情感の表現に乏しい感がある、と評している。更に、この歌に「ちぢ」という語を用いて、下の「一つ」の対がねらいで、内容が観念的である、ともいう。つまり、上の「ち」は千の意、下の「ち」は物を数ふる辞で、はたち、みそちのちに同じであり、一つ二つのつの通転である。

漢字の逐語訳という角度から見れば、私は塚原氏の指摘に頗る賛成する。それに興味をそられたので、本文において、元稹の

「秋非ニ我独秋」という詩句の原典を推考してみたい。

三

元嶺(七七九—八三二)は、河南洛陽の人であり、字は傲之である。十五歳で明経科に抜んでられ、校書郎に補せられた。唐憲宗の元和元年(八〇六)、白楽天と同時に対策して制科第一に挙げられ、左拾遺を授けられたが、しばしば天子に上書したため、極臣に憎まれて、河南の尉に左遷された。のち、元和五年、監察御史に進んだが、路上に宦官と争つて、江陵の土習參軍におとされて、元和十年、通州司馬虢州長史に転任した。通州に謫居する期間、胸中の憂鬱を発散するため、大量の詩歌を削った。元和の末年、膳部員外郎として都の長安によびもどされると、中書舍人から工部侍郎に進み、穆宗の長慶二年(八二二)には同中書門下平章事に進んで、宰相の地位についたが、間もなく罷免され、鄆州刺史兼武昌節度使に転出して死んだ。

元嶺は中唐の代表的詩人であり、白楽天とは特に親しい交わりを結び、盛んに詩の唱和をしていた。楽天は「詩経」の議論の精神を再興させつつ、楽府の本領を継承せんとし、社会批判を盛り込んだ新文学運動をひき起した。そして、その運動の結果ともいふべき、いわゆる「新樂府」が多量に作られるようになって、後漢以来八百年継承されてきた楽府は、ここにおいて、空前のリバイバルを見た。楽府を作る最後の詩人となつた新樂府の作者らの

中に、元嶺がその一人であり、楽天と共に相携えて新樂府運動推進の一翼を担った。

元和四年、元嶺は「和ニ李校書一新題樂府十二首」を削り、その序に「雅有レ所レ謂、不ニ虚為レ文」と主張した。江陵に貶謫せられて、元和十二年「樂府古題」序と十九首を削り、その序に、楽府の後世の詩人達に提供した豊富の詩想について、

其有下難レ用ニ古題一、全無ニ古義一者(略)其或頗同ニ古義一、全創ニ新詞一者上。

と述べた。それに、この二作の間に、即ち元嶺が江陵に謫居した期間に、「解秋十首」(元和六—九年)が創作され、詩の中にも古樂府から語句を引用した例が見える。漢の揚雄は世人の嘲笑を弁解して「解嘲」一篇を作った例があるので、ここでの、元嶺の「解秋十首」も、秋の意味を解き明す、と解釈すれば、間違いないだろう。その「解秋十首」の中で古樂府を引用したところは六首目に見える。

春非ニ我独春一、秋非ニ我独秋一、豈念ニ百草死一、
但念精滿レ頭、頭白古所レ同、胡為ニ坐煩憂一、
茫茫百年内、処レ身良未レ休。

調査してみると、この「春非ニ我独春一、秋非ニ我独秋一」という二句は、実は樂府詩歌の「郊祀歌十九章」の「日出入」(九章目)の「故春非ニ我春一(略)秋非ニ我秋一」からの引用である。漢の武帝の時に、天地を祀るときに、うたわれるべきうたと

して「郊祀歌十九章」が臣下によって創られた。「郊祀歌十九章」については、『史記・樂書』、『漢書・禮樂志』に説明がある。『漢書・禮樂志』において、武帝が郊祀の禮を定め、さらに樂府を設置したということを述べたあとに続けて、次のように言われる。

以ニ李延年一為ニ協律都尉一、多拳ニ司馬相如等數十人一造為ニ詩賦一、略論ニ律呂一、以合ニ八音之調一、作二十九章之歌一、以ニ正月上辛一、用ニ朝甘泉園丘一、使ニ童男女七十人俱歌一、昏祠至ニ明夜一、常有ニ神光一如ニ流星一、止集ニ于祠壘一、天子自ニ竹宮一而望拜、百官侍レ祠者數百人、皆颯然動レ心焉。

『史記』の「樂書」には「郊祀歌十九章」を創ったときのことはなしとして、さらに次のように記している。

至ニ今上即位一、作二十九章一、令ニ侍中李延年次ニ序其聲一、拜為ニ協律都尉一、通ニ一經一之士、不レ能ニ獨知ニ其辭一、皆集ニ會五經家一、相與共講習讀レ之、乃能通ニ知其意一、多ニ爾雅之文一。

「郊祀歌十九章」は司馬相如らの文人達によって作られたものであったけれど、その歌辭は難解で、ただ一經専門の學者ではその意味がつかみかね、五經専門の人を集めて共に講読し、はじめてその意をよみとることができた、その用語は「爾雅」によるものが多かった、と司馬遷は言う。この『史記』の記述は、『漢書』

に引用されていないところから見て、どこまで信ぜられるかという疑問があるけれども、逸話としては面白い。それに、現在に残されている「郊祀歌十九章」は『爾雅』を取り出して読まなければ読めないような、それほど難解なものではない。

四

「郊祀歌十九章」の中には整然とした四言詩形に従うものが八章あると共に、一方また三言を整然と重ねる形が七章八編ある。それらの四言詩はなかなか完成度の高い作品となっており、安世房中歌における四言の作品よりも優れていると思われる。三言のリズムに従うものは、用語においても、また祭事の考え方においても、『楚辭』の「九歌」にあやかろうとするところが少なくないように見受けられる。ただし、「日出入」第九はその性格が明かではなく、ほとんど押韻もしておらず、殊に形が乱れており、雑言体の作品とされている。「隋書・音樂志」上に言う、武帝裁ニ音律之響一、定ニ郊丘之祭一、頗雜謳謠非ニ全雅什。とは、とくに「日出入」等の雑言体の作品を指して批判したものである。にも拘らず、後世の詩人元稹はそれから発想して「解秋十首」を作った。

漢の作品において、無常感にたらなりうると考えられるものはこの「郊祀歌十九章」の「日出入」である。それは次のようにその辭句を展開させている。

日出入安窮、時世不_レ與_レ人同一、故春非_レ我春_一、夏非_レ我夏_一、秋非_レ我秋_一、冬非_レ我冬_一、泊如_レ四海之池_一、徧觀是耶謂_レ何、吾知_レ所_レ樂、獨樂_レ六龍_一、六龍之調、使_レ我心若_レ(一作若)一、嘗黃其何不_レ徠下一。

この作品に解釈を下して、晉灼は言う、

言人壽不_レ能_レ安固、如_レ四海_一、徧觀是、乃知_レ命甚促_一、謂何、當_レ如之何_一也。

「安窮」とは、意味は「不窮」に近く、「無窮」ということに通ずる。武帝の子の厲王晋の「歌」にも「欲_レ久生_一号無_レ窮、長不_レ樂兮安窮」と言う。王先謙の補注に、この厲王晋の「歌」の意を説明して、「既死為_レ鬼則長不_レ樂、安有_レ窮極_一也」といつている。「泊」については、顔師古の注に「泊、水貌也」とある。「泊如四海之池」とは不安定なさまは四方の海のごとくである、という意味であろう。やや後の言葉であるが、晋の木華の「海賦」に「潤泊栢而遡颺」という言い方がある。「泊栢」は小波。

「泊」という言葉はそれ自体で、波がただようさまを示す。海を池をもつて称する例は枚乘の「上書重諫_ニ吳王一書」に「朝夕之池」という言葉がある。これについて、「文選」の張統の注に「朝夕池、海也」とある。「史記」の「日者傳」にも「地不_レ足_ニ東南_一、以_レ海為_レ池」という。「六龍」とは對向は「六龍、日駕也、不_レ可_ニ頓而止_レ之」と解釈する。王逸は「結_ニ我車轡於_ニ扶桑_一、以留_レ日、幸得_ニ延年壽_一也」と言うけれども、「莊子」を見れば

「黄帝曰、陰陽四時運行各得_ニ其序_一」と言う。一方、晋の郭璞の「游仙詩七首」の三首目を見れば、「日出入」の嘆きは分りやすくなるだろうと思う。

六龍安可_レ頓、逕流有_ニ代謝_一、時變感_ニ人思_一、已秋復_レ頽_レ夏。

それから、「日出入」における「嘗黃」とは龍翼馬身の神馬である。「漢書、禮樂志」に應邵の注が

嘗黃、一名乘黃、龍翼而馬身、黃帝乘_レ之而仙。

と言っているので、「嘗黃其何不_レ徠下一」は神馬の來下しないのを嘆ずる意であろう。

「日出入」の意は人壽の短いことを歎き、六龍に駕して游仙する志を述べたものであるけれど、太陽の運行が無窮であり、四季の推移変化は毎年同じであるのに、「時世」、即ち時ないし時代はそれと同じではなく、不安定なさまは四方の海面のごとくであるとうたっているのである。そこには、人間が生存する時世のはかなさをうらむ感情が示されている。

前漢に人命のはかないことを嘆く悲哀感が確実に存在していたことはここに明かである。古詩、古歌、建安詩において、無常への慰めはしばしば現実の瞬時の生活の享樂と神仙世界への憧憬に赴く。それは中国在来の伝統思潮である神仙思想をふまえたもので、それへの憧憬が文学に示されたのである。

五

元和六年から九年にかけて、江陵に謫された元禎はちょうど壮年にあたる時期であり、才能が認められず、胸中の憂鬱を洩らすために「日出入」のうたに感銘してその言葉を用いた。元禎は「春非ニ我春（略）秋非ニ我秋」の語句を借用し、「春非ニ我獨春、秋非ニ我獨秋」という五言古体詩に書き下した。しかも「時世不ニ與レ人同一」という語句における悲嘆の精神を「頭白古所」という表現に変えた。

元禎は、単なる時間・自然の推移への悲哀感を表わすのみならず、推移の悲哀によって、自分の壮年にあたる光陰の浪費・才能の充分発揮できない不運を嘆くのである。ただし、詩人は神仙思想に懐けはしない。というのは、「日出入」は宮中詩歌であり、詩歌を創るのは漢武帝の為であり、長寿したいのは殿上人である。元禎は現実の社会詩人であるゆえに、庶民生活の実感として感じとられた情緒をありのままに、詩歌でうたう諷諭詩人であった。現実の社会に見られる不安定な姿、そこから溢れてくるさまざまな社会不安、さらに各人の生活にまで結びついた不安と不満が根底の問題として考えられなければならぬというのが当時論された元禎の言いたいことではなかったかと思う。

「楚歌十首」（元和五〜九年）十首目を見れば、詩人元禎の心境を充分了解できると思う。

八荒同ニ日月一、萬古共ニ山川一、生死既由レ命、
興衰還付レ天、樓榭王氣賦、憤憤屈平篇、各自埋ニ幽恨一、
江流終宛然。

当時の元禎の心情はまさに失意の境遇に在った建安七子の一人である王粲と、王に疎んぜられ、石を抱き汨羅江に投身して死んだ屈原とに託されている。

「日出入」は漢武帝の臣下の創った詩歌であるので、武帝の神仙思想への憧憬が濃く看取できるが、庶民性が乏しい。元來、武帝は樂府の官制を改革して、博く四方の風謡を探り、新たに詩賦を作らせようとする意向を持っていたが、「郊祀歌十九章」は選う。民間の詩歌ではなく、むしろ、政治への不満が表われていない。

後世の元禎は新樂府（音楽と相符っていない）運動推進の一員として、「郊祀歌十九章」の「日出入」第九に目を投じて、「春非ニ我春一。秋非ニ我秋一」という語句を借用し、表面的には時間・自然の推移への悲哀を歌っているようにみせながら、根本的には現実社会を反映させ、神仙思想を排除しようとする。

一方、中国の漢詩から影響を受けた日本の歌人達はこれをどう吸収して表現するのであろうか。

六

菅原道真は太宰府に流謫された際に「白氏文集」を携帯し、幽

室にこもってこれを受誦したと言われている。菅公は、他人の辞句を補綴してわずかに詩の形をなす模倣ではなく、完全に独自の鬱憤を吐露し、悲愁を詠嘆しようとした。延喜元年九月十五日によまれた「秋夜」の詩に、

黄萎顔色白霜頭。

況復千餘里外投。

昔被ニ榮花簪組綯一。

今為ニ貶謫草萊囚一。

月光似レ鏡無レ明レ罪。

風氣如レ刀不レ破レ愁。

随レ見随レ聞皆慘慄。

此秋獨作ニ我身秋一。(「菅家後集」より)

と書いている。日本古典文学大系本に拠って解釈すれば、

黄に萎める顔色 白き霜の頭

況復むや千餘里の外に投れるをや

昔は榮花 簪組に綯がれき

今は貶謫 草萊の囚たり

月の光は鏡に似たれども 罪を明むることなし

風の気は刀の如くなれども 愁へを破ることあらず

見るに随ひ聞くに随ひて みな惨慄

此の秋は獨り我が身の秋と作りたり

である。ここに、注目すべきところは結尾の「此秋獨作ニ我身秋」

である。それは確かに楽天の「燕子樓詩三首并序」の「秋來只為一人一長」(燕子樓中に寡居していると、つくづく夜の長きを感じる)と通ずる気持がある(平泉澄「芭蕉の倂」所収「白樂天」日本書院、昭和廿七年)が、一方、元稹の「表夏十首」(元和六〜九年)の

紅絲散ニ芳樹一、旋轉光風急、煙泛被ニ籠香一、露瀼妝面溼、

佳人不在レ此、恨望階前立、忽厭ニ夏景長一、今春行已及。

(傍点筆者)

を見ると、それは故人となった徐州刺史張恒の愛妓盼盼に代って寡居の苦況を述べる白樂天の「燕子樓三首并序」の「秋來只為一人長」のうたと同じ趣向に見えるのではないかと思う。だから、ただ楽天の「秋來只為一人一長」を提出して、それを菅公の「此秋獨作ニ我身秋一」の発想であるとは一概に言えなくなるだろう。況して漢字語句の運用から考えれば、菅公の「此秋獨作ニ我身秋」の詩句は楽天の「秋來只為一人一長」の詩句よりも、むしろ元稹の「秋非ニ我独秋一」の方により近いのではないか。

元稹は江陵に左遷せられて、「秋非ニ我独秋一」と詠じた。それと同じ心境で、感慨無量で、菅公は「此秋獨作ニ我身秋一」に詠歎した。道真の貶謫をよんだ詩を見ると、元稹の詩への感情移入のひびき及び漢学の造詣も窺えるだろう。

『古今和歌集』卷五、七四七に、

五条のきさいの宮のにしの対にすみける人に、本いにはあらで、もの言ひわたりけるを、睦月の十日あまりになむ、

はかへ隠れにける。あり所は聞きけれど、え物言はで、又の年の春、梅の花さかりに、月のおもしろかりける夜、去年を恋ひて、かの西の対に行きて、月のかたぶくまで、あばらなる板敷にふせりて、よめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にしてがある。これは業平の代表作ともいへき一首である。古来の注釈は上の句の二つの「や」（助詞）を反語と見るか、詠歎と見るかによって、諸説がある。

さて、この歌を、白楽天の「春至但知_レ依_二舊春_一」（「別下種_二東坡_一花樹上_二兩絕_一」より）に拠る、とする説谷孝彦_二郎氏_一平安時代文学と白氏文集増補版_二二八頁_一や、初傳詩人劉希夷の有名な「代_二白頭吟_一」の「今年花萼顏色改、明年花開復難在（中略）」年年歳歳花相似、歲歲年年人不_レ同」の気分から暗示を得たと視る小島窓之氏の説（『上代日本文学と中国文学』下、一八三五頁など）がある。また、金子_二比呂氏_一の『古今和歌集新釈昭和版』（昭和二年刊明治書院）ほこれを鶴姫の詩「彌上_二江樓_一思_レ渺然、月光如_レ水水連_レ天、同來_レ詠_レ月人何処、風殺_レ稀似_二去年_一」と同一軌である、と言っている。発想の仕方はいずれも中国の漢詩に由来しているかも知れないが、従来様々な解釈が行なわれていて、その細鱗も知らぬ状態になっているのである。

けれども、元禎の「春非我獨春」及びその引用の元となつてゐる「日出入」での「時世不_レ與_レ人同一」をふたたび見ると、その底流に心情の相通するところもあると言つてもよいであらう。

いづれにせよ、業平の詩句の上の句と下の句に、自然と自分の身の上とが切実に対照せられ、ポツリと途切れたような結句の隙に千万無量のもののおもいがむなしく語られずに潜んでいることだけは、詠歎の相違を超えて、逐語訳という壁を突破し、確實に感じ取ることができるであらう。元禎の、天地の運行や四季の推移は変らないのに、人間の境遇は変わるという意図が業平の歌に生かされているように思われる。

愛し合った二人がどちらの心変わりでもないのに、引き割かれてしまつて、今は女の居る場所は見当が付いていても、絶対にそこへ通う術は無い。そんな悲劇的な境遇に陥つた業平は、照りもせず、曇りも果てぬ春の夜の颯月に女の面輪を想ひ拙き、馥郁とたちこめる梅の香りに、彼女の衣裳の移り香を想ひ出したりして、彼は悔恨とも抗議とも悲嘆とも付かぬ気持になつた。言つてみれば、業平はそれらのすべてが錯綜した感乱の思ひの中で一夜を過した。そして、このように、一首の歌がそうした感乱の中から生れた。

一首の歌がそうした混乱の情緒から奔り出たものとすれば、「や」という助詞も、反語とも詠歎とも付かぬ取り留めのないものであつても、技巧力の欠陥とは言えぬと思う。どちらにしてもよい道

理ではないか。その歌の全体がすつきりした口語訳にきれにくい、ねじれた表現になったのも当然のことであり、まさに、業平の當時の心情の反映ではないかと思う。これは、業平の技法的欠陥とならず、かえって豊富な余情が紙面に躍りながら、効果をあげていると私は考えたいのである。

自然の永遠的不変性と人生のはかなさとの対比によって、歲月の移ろいへの哀歎、そしてむなしく人事の変わることを詠歎するのは、言うまでもなく、中日詩人達の間に相通する感銘であろう。発想の源は中国の漢詩に由来するかも知れないが、作者はその時の心情を素直に、感動したまま、粉飾なしに自分なりに漢語を自分の詩の中に熔化し、歌を詠み上げて、漢詩の逐語訳ではなく、詩作の気分を作成できるならば、既にその歌の価値は抹殺しえないと思う。同じ源流から地勢によって違う方向へ滔滔と流れていくことこそ文化の花を咲かせていくのであろう。

(岡山大学大学院文学研究科)

研究室受贈図書雑誌目録 (二)

- 愛媛国文と教育 (愛媛大学) 第二十号
- 大阪青山短大国文 第五号
- 大谷女子大國文 第十九号
- 大妻国文 (大妻女子大学) 第二十号

大妻女子大学文学部紀要 第二十一号

学大國文 (大阪教育大学国語国文学研究室) 第三十二号

香椎編 (福岡女子大学国文学会) 第三十四号

活水日文 (活水学院) 第十九号、第二十号

活水論文集 第三十二集

金沢大学教養部論集 人文科学編 26ノ2、27ノ1

岐阜女子大学紀要 第十八号

岐阜大学国語国文学 第十九号

九州大谷國文 (九州大谷短期大学) 第十八号

金城國文 (金城学院大学) 第六十五号

近代文学論集 (日本近代文学会) 第十四号

恵泉女子園大学人文学部紀要 第一号

研究紀要 (尚綱大学) 第十二号

研究紀要 (日本大学人文科学研究所) 第三十六号、第三十七号

言語学論叢 (筑波大学一般・応用言語学研究室) 第八号

考 (考の会) 第二号

高知大國文 第十九号

甲南國文 (甲南女子大学) 第三十六号

甲南大学紀要 文学編 72

語学と文学 (群馬大学語文学会) 第二十五号

語学・文学研究 (金沢大学教育学部国語国文学会) 第十八号

国語科関係論文 (富山大学教育学部) 第三十七号